

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昔はどう言ったかと,知りたいとき

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石井, 久雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002897

1. 昔はどう言ったかと、知りたいとき

言語体系研究部第三研究室

石井 久雄

————— 昔はどう言ったかと、知りたいとき、
というこの標題の、「と、知りたい」が、おちつきがわるいと、お感じになったかとおもいます。この標題を、研究所内ではじめてだしたときにも、まわりのひとから、そのことをいわれました。しかし、普通の文章ではなく、一種のコピーだから、文法やぶりもレトリックのうちだろうと、あまえまして、はじめのまま、ご覧になるとおりにしておきました。標題を、おちついたものとするためには、あるいは、「と」を「を」にかえるのが、よいでしょうか。あるいは、「知りたい」のかたちをあらためて、昔はどう言ったかと、「知りたくなる」とき、「知りたくなった」とき、とするのが、よいでしょうか。それでも、まだ、なにかおちつかないかもしれませんが、ここでこれからもうしあげようとするのは、いま、「知りたい」のかたちを、ふたとおりにあらためてみた、そのふたつのばあいの内容になります。すなわち、
昔はどう言ったかと、「知りたくなる」とき、というのは、どういうときであるか、
そうして、「知りたくなった」ときには、どのようにして知ることができるだろうか、
ということです。

————— 昔はどう言ったかと、知りたくなるとき、
五十年くらいまえまでは、そういうことが、よくあったらうと、かんがえられます。
そのばあい、昔というのは、特に、王朝時代の、みやびの世界をさして、そのことばは、古言あるいは雅言とよばれました。それに対する、今のことばは、俗言とよばれています。つまり、俗言ではこうであるが、古言あるいは雅言では、どうであったのかという、といかけが、しばらくまえまでは、かならずしも、めずらしくはありませんでした。和歌をよむとき、また、てがみをしたためるときを、はじめとして、文章をかくときというのは、古言あるいは雅言が必要となるときでした。

和歌は、明治のものでも、まだ、一般的な風潮として、雅言を尊重していました。江戸時代までの和歌のありかたを、ひきついでいたのでしょう。現在の和歌について、どのような状況にあるのか、わたくしは承知していませんが、えらぶことばも、随分自由になったのであろうと、最近の『サラダ記念日』ブームに接して、想像します。

てがみの文章も、ついさきごろまで、男子ならば候文、女子ならば消息文という、それぞれの様式にしたがってかくのが、習慣でした。候文は漢文の系統の、消息文は和文の系統の、いずれも昔からの、かたです。明治時代、兵隊は、戦地から郷里にあてて手紙をかくのに、代筆をたのんだといひます。字がかけないからなのではなく、むしろ、てがみがかけない、てがみらしい表現・文体をとってかくことができないからなのでした。すこしでもあらたまらなければならぬときには、かたにしたがう技術を要しました。小説に文語をもちいた最後の作家、樋口一葉は、その、文語をみごとにあやつったこととともに、てがみの代筆をしていたことも、よく知られています。野口英世にあてた、ははのてがみ

は、ひとのむねをうつものとして、有名ですが、かたをやぶっていることが、ひとのむねをうつ、ひとつの要因となっているかもしれません。

しかし、そういった、和歌にせよてがみにせよ、わたくしたちにちかい世代のばあい、生活全般のうちで、どれほどのおもみをもっていかかという、実は、さほどではなかったかとおもいます。しかし、それにしても、わたくしたちの世代では、和歌が、かつてよりおもみをもつようになったということは、ないでしょう。てがみは、はなしことばにかぎりなくちがっています。わたくしたちの世代と、そのまえの世代とのあいだには、この、てがみの文章のちがいが、端的にしめしているように、言文一致の思想の勝利という事実があります。それを決定的にしたのは、国定読本の採用した言語が口語であったことで、そのあたりの事情は、あとで飛田良文さんからおはなしがあります。わたくしたちにかかわる、その世代間の断絶は、はなはだおおきいもので、いま、雅言の地位は、まったくといってよいほどに、うしなわれることになりました。

そのような現在において、昔はどう言ったかと、知りたくなることは、あるのでしょうか。ない。おそらく、ちょっとかんがえつかない。でしょう。わたくしが、これから、もうしあげなければ。だから、「昔はどう言ったか」と、疑問のかたちをとって、標題のうちにしめされたものが、そもそも、どういう疑問、問題であるのか、理解しがたい。のではないかと、おもいます。この標題が、おちつかないだろうと、はじめにもうしあげましたが、そのおちつかなさの背後には、そういうわかりにくさが、ひかえています。この標題は、文法の規格にあわせてみても、現在にいきているわたくしたちには、根本的には、やはり、おちつかないのかもしれない。

————— 昔はどう言ったかという問題は、なにを意味しているのか、それを理解していただくためには、この問題がどのようにうまれてきたか、ということをもうしあげるのが、よいだろうとおもいます。簡略にとどめますが、もうしあげることとします。

ことばを調査研究する観点には、いろいろありえますが、ある現象が歴史的にどのように位置づけられるか、というの、そのひとつです。たとえば、きょうの研究発表会テーマにうたわれもしているように、語には、それぞれ、かたちと意味とにおいて、になってきたものの歴史があります。たとえば、動詞「来る」の活用は、特殊ですが、動詞の活用全体の歴史のなかにおいてみれば、複合語「出来る」にあらわれているように、いずれ普通の活用に変化するにちがいないとかんがえられます。語の範囲をこえても、たとえば、現在、「シ」の音を「スイ」と発音するひとが、おおくなってきたようにみうけられますが、サシスセソの音の歴史をかえりみるならば、それも当然であるかとかんがえられます。ひとをさす代名詞の体系とか、語彙の体系とか、敬語の体系とか、おおきいものについても、歴史をとらえ、歴史のなかでの位置をとらえることができます。

そういうなかで、ある意味に対して、どのような語・語句がもちいられてきたか、その歴史がたどられてもよいだろうと、おもいました。たとえば、わかれの挨拶として、中世にかかれたいわば時代小説のなかで、武士は、「いとまもうして、さらば」と言われている。わたくしたちは、「さようなら」、あるいは「じゃ」と言っている。現代語で「さようなら」と言うのは、いつにはじまったことなのか、そのまえは、なんと言ってきたのか、歴史的にたどってみよう。ということになります。普通に語の歴史をたどるならば、

「さようなら」の語源にせまりますが、ここでは、意味、わかれの挨拶、という軸をさだめ、ある語・語句から別の語・語句へと、たどるのです。そうかんがえたことを、ひとつのコピーとして表現してみたら、標題になったということになります。

このような問題は、かつて、まったくかんがえられなかったわけではありません。一語の歴史ではなく、意味的に関連をもつ一群の語の歴史をたどろうとするのは、語彙史という研究領域を構成して、語の歴史を研究するときの最近の一般的な方法でもあり、すぐれた成果もあげられています。言語地理学の方法も、あるものごとを、どのように言いあらわしているか、ということを中心にしています。対照言語学の方法も、同様に、日本語でこう言うのを、ほかの言語ではどう言うか、というようになります。それにもかかわらず、ここにわざわざ問題としてしめたのは、歴史的なところが、きわめてよわいからです。語彙史があると、いまいったばかりではないか、という反論は、もちろんなりたちますが、それは、やはり、語がになってきた意味についての歴史を、あきらかにすることに、主眼があり、だからこそ「語彙史」となります。ここにしめた問題は、ある意味に対して、ときあかさされるのは、語であってもよいし、語句であってもよいし、文法形式であってもよい。あるいは、ことばとしてはなにもなく、たとえば、わかるには、なにもいわず、ただあたまをさげて、さってゆく、それが正式であった、というような結果がでてくる可能性を、あらかじめ排除しておくことは、さけるべきです。昔はどう言ったか、の「どう」は、ことばだけでなく、ふるまいをもふくむものとしましょう。このかんがえかたを、研究領域として設定するならば、「表現史」となづけてよいおもいます。

昔はどう言ったかと、知りたくなるとき、それがどのようなときであるか、わたくしたちのいま現在について、さきほどは、ちょっとかんがえつかないと、こたえをだしたのでした。それを知ったところで、わたくしたちには、えるところがないと、いっていたことになります。多少ゆずったとして、和歌をよんだりするときに、そのような実際上の要求もあるだろう、という程度でしょう。実際上はそういうことでしたが、しかし、ここで、学術的な意義をあたえたことになります。昔はどう言ったかと、知識・研究を蓄積すること、その意義は、歴史学がもっている存在意義と、おなじであろうとかんがえられます。すなわち、わたくしたちの現在が、どのような伝統を継承し、背景として、成立しているのか。それを理解することが、この知識・研究を蓄積する目的であるということです。

なお、学術的な欲求と、実際上の要求と、わけてもうしあげていますが、区別がつかなくなるところもあります。たとえば、語史・語源をしりたいというのは、どちらでしょうか。語史・語源をあきらかにしたいというのは、学術的ですが、その結果をしりたいというのは、実際的のものである、ということになります。しかも、この、実際的といっていることは、知的好奇心にかかわるにすぎないとも、いうことができ、実生活の役にたつということではありません。こうした水準の欲求・要求であるならば、それは、一般に、学術のほうが先行するといつてよいでしょう。わたくしたちは、どのような知識があるのか、ありうるのか、ほとんど理解していないといえることができるでしょう。知識としてありうるのだ、ということ、しらないでは、その知識を獲得しようという欲求は、うまれるべくありません。かくかくの知識がありうるのだということ、うったえることは、学術のつとめであるとかんがえる次第です。

—— さて、昔はどう言ったかと、知りたくなるとき、そのときは、どうしたらよいでしょうか。今のことばから、昔のことばをひきあてる辞典があったら、それをひけばよいでしょう。

たとえば、わかれるにあたって、今、「さようなら」と言うのを、昔はどう言っていたのか、それを知りたくなるとしましょう。しかるべき辞典をひくと、昔は「さらば」と言っていた。それは中世からであって、それよりさきは、どうもよくわからないらしい。ということがわかります。辞典によっては、もうすこし、つっこんだことが、かいてあるかもしれません。現在、普通につかわれる「じゃ」をかんがえあわせてみても、言いかたは、変化しているけれども、ひとつの話題にきりをつけて、転換をはかろうとする、そういう発想は、むかしから、ひきつがれている。というようなことです。

よんで、それが日本民族の発想かと、感想をもつこともできます。わかれるときの、日本語の発想は、英語とは随分ちがうと、気がつきもします。英語“good-bye”“farewell”は、あいてのさいわいをねがっているようです。いや、そういえば、しりあいにも、「ご機嫌よう」とあいさつしてくれる、素敵なお婦人がある。それが、この辞典にはかいていないではないか、など批判することもできます。

辞典をひらいたついでです。わかれるのと反対に、であったときの挨拶、今言う「今日は」は、どう言っていたのか、それも辞典でひいてみましょう。しかし、ほとんどなにもかいてありません。英語“good morning”は、おなじひ、おなじひとに、であったかぎり、なん回でも言うようだが、日本語「おはようございます」は、一回しか言えない。日本語は、ことによると、もともと、そのような、かたにはまった表現を、つかわなかったのだろうか、かんがえさせられることになります。

—— 現代語＝古代語辞典というなまえをもって、こういう辞典を、かりによぶことにしましょう。いま、いかにも、その辞典から引用したように、もうしあげましたが、実は、現代語＝古代語辞典というものは、しかし、現在は存在していません。引用したようにご覧いただいたのは、その項目だけ、適当につくってしまったものです。それでは、現代語＝古代語辞典をつくりましょうと、ここからもうしあげることになります。そのはずです。はずですが、かくもうすわたくしは、その辞典をつかいたいとおもうばかりで、つくるがわにたつだけの、いろいろな条件を、そなえていません。そこで、すくなくも、当座、どうしたら、現代語＝古代語にかわるものを、えることができるか、それを、つぎにもうしあげることとします。現代語＝古代語辞典をつくらうという際にも、基礎作業として、必要になることです。ふたつあげます。

第一に、すでにもうしあげましたように、語彙史の領域に、すぐれた成果があります。それを参照することになります。いま、現代語＝古代語辞典の記述の例とした、「さようなら」の一項は、関係する語彙をまとめてあつかった論文をもとに、つくりました。

ところで、語の研究の成果は、辞典に集約されるといいます。そこで、現在わたくしたちが手にすることのできる、古代語辞典、あるいは古代語をふくむ国語辞典について、解説の現代語をうまくさがしだすことができれば、そのみだし、すなわち古代語を、知ることができます。とんでもないつかいかたですが、現在の電子機器はまことに便利で、よく知られている中型国語辞典のいくつかは、コンパクト＝ディスクでも出版され、解説部分を簡単に検索することができます。昔はどう言ったかと、知りたいとき、便利です、など

という、うり文句は、かかげていませんが、目的にあわせてつかうことはできます。

第二に、古代文芸作品には、現代語訳がよくできています。その現代語訳をよんで、必要な表現をさがし、古代語の原典にあたることになります。たとえば、『源氏物語』の全体について、現代語訳と原典古代語との対照表をつくれば、現代語の表現の相当の量が、王朝時代にどう言ったか、知られることになります。また、外国語作品の、昔の翻訳と、今の翻訳と、双方が手にはいれば、それを対照させて、今の表現から昔の表現を知ることができます。平安時代以降の漢文の訓読、中世近世の交のキリスト教関係文献は、その昔の翻訳にあたるものです。中世近世の交のキリスト教関係文献のうちには、当時の日本語を当時のポルトガル語で説明した辞典があり、そのポルトガル語を現代の日本語に翻訳したものが、十年ほどまえに出版されました。この現代日本語の索引をつくれば、昔の日本語にたどりつくことができるようになります。

古代文芸作品の現代語訳では、残念ながら、いま、索引も、コンパクト=ディスクも、ないようです。外国語関係のものも、同様です。それらは、したがって、当座の役にたてるわけにはゆきません。いき字びきにたずねるほうが、はやい。ただ、キリスト教関係文献のうちには、ラテン語=ポルトガル語=日本語を、対照させた辞典もあります。現代日本語をラテン語に翻訳して、その辞典にあたれば、ただちに当時の日本語を知ることができ、それが例外的に検索しやすいものです。

なお、昔というのを明治時代あたりにおき、それ以降について、あるものよびかたをたどろうとするならば、大量に出版された英和辞典などを利用することができます。英語“thermometer”にあたるものが、どのような歴史をもって現在にいたっているのか、つぎの発表者、梶原滉太郎さんが、おはなししてください。いまもうしあげているような観点からおききいただければ、わたくしとしては、さいわいです。

——— 現代語=古代語辞典ができあがったら、その性格は、さまざまな辞典のなかで、どのようなものということになるのでしょうか。いまは、まだ、現代語=古代語辞典のかわりになることを、もうしあげている段階で、気がはやいともおもいますが、このことは、昔はどう言ったかという問題の探求が、国語研究のうちに、どのような地位をしめるかと、とうことと、おなじことにもなるのです。研究の位置づけも必要であり、そのようなべかたをしてもよいのですが、はなしのゆきがかかりで、辞典としてもうしあげます。

わたくしが、ここで、イメージしながら、もうしあげてきた、現代語=古代語辞典は、英和辞典に対する和英辞典のように、古語辞典のみだしと解説とをうらがえした体のものです。そのかぎりでは、歴史的国語辞典の一種です。しかしながら、また、別の性格をみることもできます。

はなしをひっくりかえすことがおおくなって、まことに恐縮ですが、現代語=古代語辞典は、きわめて簡単なものならば、かつてなかったわけではありません。すでに、江戸時代の国語研究者が、和歌をよむ参考のために、つくっています。あるいは、てがみをかき参考のために、つくっています。勿論、江戸時代語=平安時代語辞典であり、というより俗語=雅語辞典です。どの和歌集に実例があるか、あるいは物語にあるか、など、注釈もついています。和歌、あるいはてがみのためのものですから、かたをしめすことに重点があって、表現の歴史というような観点は、当然ながらありません。明治時代にも同様の辞

典がいくつかあらわされましたが、学術的ともいってよい、出典に関する注釈は、なくなりました。そうした注釈は、ほどこされないままですが、現在おこなわれている類義語辞典のうちには、古代語をあげているものがあります。このような辞典の系譜のなかにおいてみるならば、現代語＝古代語辞典は、類義語辞典の一種としての地位をあたえることもかんがえられます。

類義語辞典の利用については、最後の発表に、宮島達夫さんのおはなしがありますが、古代語の表現を意味的に整理するために、つかうことも、なされているようです。それを歴史的に展開させるという水準には、まだいたっていないようです。

昔はどう言ったか、というのを、かえて、ある地域ではどう言うか、とすると、これはすでにもうしあげましたが、言語地理学の観点であり、その研究はすすんでいます。辞典も、共通語から各地方の方言をひく、というかたちで、いくつか、りっぱなものが、つくられています。それをおもいあわせるならば、現代語＝古代語辞典がなかったのが不思議でもありますが、つまり、現代語＝古代語辞典は、共通語＝方言辞典にたぐいするものであるとして、地位をあたえることができます。この性格は、ある意味では、類義語辞典のものでもあります。事実、類義語辞典で、古代語をあげているものは、方言をもあげています。

ここまでくると、ひとつさきが、みえているのかもしれませんが。現代の共通語をみだしとして、現代語で、どのような条件のもとに、どう言い換えられるか、古代語ではどう言ったか、各地方言ではどう言うか、職業とか階層とかによって、どう言ったか、どう言うか、国語の表現を総覧するような辞典を、つくることができるでしょう。現代語＝古代語辞典は、そのような辞典にふくまれるときには、その中核の地位をえるのではないかとおもいます。

——— と、ゆめをもうしあげたところで、おはなしは、おしまいです。ふるしきをひろげただけの、おはなしについて、最後に、おわびがてら、もうしひらきをします。

この研究発表会の趣旨は、研究の成果をおおやけにすることにあります。しかしながら、いまもうしあげてきたのは、おわかりのとおり、いまだ研究をはじめていない、辞典作成という目標らしいものだけ、あるにはあるが、研究計画すらたてていない、というものです。したがって、わたくしが、もうしあげることができたのは、昔はどう言ったかという知識が、ありうるのだということ、わずかに、それにつきます。今後、この研究に、てをつけるということも、あまりかんがえられません。そこにとどまったおはなしであることが、おわびをしなければならないことです。

このように、研究テーマとしてかんがえられ、しかし、そこにとどまった、というものは、研究所にすくなくないはずですが。成果がありませんから、おもてにできることもなく、研究員どうしでもしらないこともあります。ときには、そういう発表もよろしかろう、ということで、きょうの研究発表会に登場させることになりました。本日、ここにおいでのかたがたは、その点では、稀有のだしものをご覧になった、ということで、おゆるしをこいたいとおもいます。